# はじめに

本書は、大学の教養系、国際系、社会科学系、人文科学系の学部・学科の学生を主な対象とした国際経済論のテキストです。また、経済学の素養に乏しい社会人にも参考になる内容となっています。さらに、経済学を専門として学ぶ学生にとっても、より広い視野から国際経済、世界経済、外国経済を理解できるように工夫してあります。

本書の特徴は以下の通りです。第１に、国際経済学の多くのテキストはかなり理論に偏っていますが、本書では理論、歴史、政策をバランスよく配合しています。読者が教養としての知識を得られるべく、国際経済、世界経済などの総合的な考え方、これまでの経緯、現実の状況と政策課題を解説しています。

第２に、本書では理論をわかりやすく説明することを心がけています。類書では、結構難しい図や式による説明がありますが、本書ではそれらは最小限にとどめ、かつ国際経済現象の基本を押さえられるようにしています。

また、本来国際経済学を学ぶ前に、少なくともミクロ経済学とマクロ経済学を理解しておくことが必要ですが、本書ではこれらの基礎経済学のポイントを説明して、本書１冊で国際経済論ないし国際経済学を理解できるようにしています。「経済学の基本」を囲みで立てて、読者の理解を助けるようにしました。

以上が、筆者が大学経済学部時代から経済学を苦労して学んできた経験を踏まえた本書の特徴です。加えて、これまで国際協力関係者で経済学の素養がまったくない社会人（日本人の公務員・コンサルタント、外国政府官僚）に対して行った国際経済学や基礎経済学の講義の経験も生かしています。

第３に、次につながる実践を示すことによって、読者の関心を高めるように工夫してあります。経済系の学問は、読者の日々の生活と直接関係がないために、学生諸君の関心を惹かないという現実の講義での状況を踏まえたものです。

本書では「次の一歩」を囲みで立てて、ネット・サーベイによる統計などのダウンロードの仕方や『日本経済新聞』などの経済記事の活用方法を示します。また、現場の状況に肉薄すべく、インターネットのホームページを多く引用しま

す。その際に、リアルタイムのビデオも紹介します。加えて、やさしい演習問題も数多く用意しました。

第4に、多くの国際経済に関わる類書は先進工業国の経済をベースに考えています。本書の中心は一般的な経済理論のベースになるこれらの経済ですが、中国を筆頭とする新興（市場）国など（発展）途上国も適宜扱います。特に、今日の世界金融危機に対処するにあたって、新興市場国がG20サミットなど国際会議の場で存在感を示すようになっています。また、これらの国々に加えて貧困国も扱うことによって、真の国際経済論、世界経済論になると考えます。

本書執筆にあたっての問題意識として、2008年からの世界金融危機とその後の新しい世界経済・国際経済があります。世界経済の歴史において、世界が動いた特別の日を挙げることができます。政治面においては、2001年9月11日のアメリカでの同時多発テロです。当時のブッシュ政権が経済政策面でも経済・金融の自由化の強制など単独主義に走ることになりました。

経済面で最も重要な事件は、2008年9月15日のアメリカの投資銀行、リーマン・ブラザーズの破産です。その後のアメリカ、ダウジョーンズ指数や日本の日経平均の株価の暴落に代表される世界経済の落ち込みは、1930年代の大恐慌に次ぐものでした。

その破産から2か月後、11月15日にG7と有力新興市場国が一緒になったG20のサミットが開催されました。その後、2011年10月までに通算5回のサミットが開催されてきました。

この政策対応には大きく2つの意味があります。第1に、欧米主体の先進工業国に対して中国を筆頭とする新興市場国の経済規模が大きくなったということです。世界経済、国際経済を運営するに当たって、G7では不十分となったのです。

第2に、1980年以降、特に冷戦以降の世界において英米主導で強制的に実施された急速な経済・金融自由化が両国で大破局をもたらし、新たな経済秩序が目指されているということです。特に、国際金融を含む金融制度の再構築が焦眉の課題となっています。

本書は、中国など先進工業国以外の国々を含んだ真の国際経済論であり、また経済や金融の基本を提示しながら、総合的に理解できよう構成されています。

ただし、国際経済事象は幅広く、特に経済・金融などの自由化によりそれまで国内市場と思われていた分野も国際経済の対象となっており、これらの多くの事項・事象を筆者がすべて分析することは困難です。必須の基本的な事項、情報は押さえるとして、サーベイは、浅いものにとどめています。

また、国際経済の主な課題やテーマ、日本を中心とした世界経済の主要国・経済を扱いますので、個別に深く掘り下げることはしません。よって、読者の理解を深めるために提供する情報はマクロ的なものが中心です。国際的に活躍する専門家が多用し、かつネットなどで入手可能な国一覧表などを多く示すことで、読者の理解を助けています。

さらに、先進的な金融取引については、深い分析は行いませんが、金融や国際金融の基本的な考え方や理解の仕方は、わかりやすく解説します。

一方、現実経済を理解するために、経済外の事象も説明することにしました。経済のみが独立で動くわけでなく、自然、社会、政治の方面の重要な条件を第1章で説明しています。ただし、基本的な事項にとどめました。

本書の構成は、基本的に類書と似通っていますが、大きな違いの一つは、まず総合的に国際経済を理解するために、現代の国際経済問題を第1章で説明しながら、考え方や分析の方法を示したことにあります。また、第2章で国際収支を取り上げ、国際経済取引の全体を理解できるようにしました。その後の第3～5章は、国際金融を含む国際経済の主要項目の個別の分析をします。そして、第6章のオープン・マクロ経済学では理論の総合化と政策論を展開します。

第7章は国際経済に関わる政策や制度を全般的に扱いますが、今日の世界金融危機後の国際金融制度改革も分析します。

そして、第8章は、類書の多くと違って、第5章の民間中心の国際金融に加えて、公的金融に対応する途上国に対する経済協力と援助の問題を対象とします。

末尾ながら、本書の刊行にあたり、お世話になりました大学教育出版の佐藤守社長と編集スタッフの方々に厚くお礼申しあげます。

2012年3月

坂元浩一

教養系の国際経済論

―総合理解から次の一歩まで―

# 目　次

はじめに……i
略語表……x

序　章　国際化の大進展と人類への挑戦……1
A．世界に展開する日本人　1
B．凋落した日本の国際競争力　3
C．100 年に 2 度の世界金融危機　6
D．人類共通の目標：貧困削減　7

第 1 章　現代の国際経済―全体像をバランスよくつかむ―……10
第 1 節　国際経済の捉え方の基本　10
（1）経済関係のモデル化（単純化）　10
（2）フロー・アプローチ　19
（3）ストック・アプローチ　20
（4）政策枠組み　23
（5）経済統計　35
（6）非経済要因　40
第 2 節　世界経済のサーベイ　42
（1）世界経済の基本構造　42
（2）文　献　56
第 3 節　一国経済のサーベイ　58
（1）分析枠組み　58
（2）事例：日本を中心として　65
（3）文　献　68

第 2 章　国際収支と為替レート―国際経済取引を総括的に知る―……72
第 1 節　国際収支の基礎事項　72
（1）国際収支の経済における位置づけ　72
（2）国際収支の特徴　75
第 2 節　趨勢と現況　77

第３節　捉え方の基本　*78*
（１）分析枠組み　*78*
（２）国際収支の基礎理論　*86*
第４節　政　策　*93*
（１）国際収支のファイナンス手段　*93*
（２）事例：黒字国・日本を中心として　*95*
第５節　歴史的推移　*97*
第６節　ストックとしての対外純資産　*98*
第７節　為替レート（相場）　*99*
（１）基礎事項　*99*
（２）捉え方の基本　*102*
（３）政　策　*118*
第８節　国際経済取引の国比較　*123*

第３章　国際貿易……*126*
第１節　基礎事項　*126*
第２節　趨勢と現況　*127*
（１）世界の貿易　*127*
（２）日本の貿易　*129*
第３節　捉え方の基本　*130*
（１）分析枠組み　*130*
（２）貿易理論　*132*
第４節　貿易政策　*139*
（１）保護貿易政策　*140*
（２）貿易自由化政策　*144*
第５節　国分類　*147*

第４章　海外直接投資（FDI）……150
第１節　基礎事項　150
第２節　趨勢と現況　151
（１）　世界の投資　152
（２）　日本の投資　153
（３）　ストック　153
第３節　捉え方の基本　154
（１）　分析枠組み　154
（２）　基礎理論　156
第４節　政　策　163
（１）　世界の動向　163
（２）　日本の動向　164
（３）　国際競争力ランキング　165

第５章　国際金融……169
第１節　基礎事項　169
第２節　捉え方の基本　172
（１）　分析枠組み：市場の構成　172
（２）　分析枠組み：市場の秩序　180
第３節　外国為替市場　184
（１）　基礎事項　184
（２）　趨勢と現況　186
（３）　捉え方の基本　187
（４）　外国為替取引の実際　190
第４節　その他の国際金融市場　190
（１）　資本市場　191
（２）　オフショア市場　193
第５節　政　策　193
（１）　政策の推移　194
（２）　世界における自由化　194

（3） 日本の国際金融自由化　195
第6節　証券の国別ランキング　196

第6章　開放（オープン）マクロ経済学……199
第1節　IS-LM 分析の基本　199
第2節　基礎理論　206
第3節　現実の政策運営　208

第7章　国際経済・金融の政策と制度……210
第1節　全体的推移　210
第2節　ブレトンウッズ体制―1970 年代初めまで　211
（1） ブレトンウッズ体制　211
（2） 貿易体制　212
第3節　ブレトンウッズ体制後の推移　215
（1） 経済自由化の推進　215
（2） 世界金融危機　217
第4節　途上国の政策　219

第8章　経済協力と援助……221
第1節　基礎事項　221
第2節　趨勢と現況　223
第3節　捉え方の基本　225
第4節　政　策　225

参考文献・統計……228